

館山市 大巖院 石塔の ハングル 書体について

張栄吉 (東国大学校 人文科学大学 教授)

日本国千葉県館山市の 大巖院にあるハングル石塔(以下「石塔」と呼ぶ)の建立経緯や背景等については、既にいくつかの関心ある方達が自ら研究したものがある¹⁾。したがって本発表では、ハングルで書かれた部分の書体についてのみ集中的に考察してみようと思う。本発表の論議過程で必要な写真資料は、この文の末尾に一括で添付してあるので参照してほしい。

この石塔の東面に彫られたハングル表記は、いわゆる東国正韻式漢字音表記だ。東国正韻式漢字音表記法は朝鮮4代王である世宗の語文政策によって始められたものだ。世宗はハングルを作って、それで純粋韓国語を正確に表記したのみだけでなく、漢字音も正確に表記しようとした。

ところが、この当時既に朝鮮には中国とは違った朝鮮式の漢字音(これをしばしば「東音」と言う)が使われていたが、世宗はこの朝鮮式漢字音を中国の原音に近い形に直して表記して、この改められた漢字音を国民達に教えようとした。このような努力の結果、編纂されたのが『東国正韻』(1447年)²⁾だ。

したがって、東国正韻式漢字音表記は当時の朝鮮の現実漢字音でなく、中国原音に近い再構された音であり、理想音と言える。東国正韻式漢字音表記には、当時の純粋韓国語表記で禁止されていた各字並書(ㄱ, ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㅁ, ㅂ, ㅅ, ㅈ, ㅊ, ㅋ, ㆁ)が使用されていて、純粋韓国語表記に広く使用されていた合用並書(ㄱ-, ㄴ-, ㄷ-, ㄹ-, ㅁ-, ㅂ-, ㅅ-, ㅈ-, ㅊ-, ㅋ-, ㆁ-)は全く使用出来なかった。そして終声がない漢字音には'ㅇ'や'ㅇ'等の字を付けておいた。この石塔の「南無阿弥陀仏」字中の「ㄹ(無)」と「ㅇ(阿)」と「ㅇ(弥)」の終声表記(ㅇ)は、当時の朝鮮の現実漢字音表記には必要ないのだ。

ところがこの東国正韻式漢字音表記も『訓蒙字会』(1527年)³⁾の時代になれば現実漢字音に移行して行く。

1) 次の論文を参照できる。

石和国秀幸(2001)、「日本韓(朝)友好の先駆者雄營上人」、(『千葉のなかの朝鮮』、千葉県日本韓国・朝鮮関係史研究会)

愛沢伸雄(1995)、「大巖院「四面石塔」に刻まれたハングルの謎」、(『房総史学』35号、千葉県高等学校教育研究会歴史部会)

2) 「東国正韻」は世宗当時に朝鮮から現実的に発音されている漢字音を中国原音に近い形に矯正しようとして編纂されたもので、世宗29年(1447年)に完成した韻書だ。全6巻6書で構成されている。ここには91韻母と23声母が現れるが、この中で23声母はそのまま訓民正音17子音と関連がある。したがって「東国正韻」は訓民正音(ハングル)を創製する過程で重要な意味を持つ。

3) 「訓蒙字会」という朝鮮11代王である中宗22年(1527年)に当時中国語通訳官として立身出世した崔世珍が作った漢字玉篇に該当する書で3巻1書でできている。約3360個の漢字にハングルで、発音と意味を付けてある。漢文初学者が利用できる書であるから、その需要が多く後代になんども重刊本が刊行された。現在原刊本と推定される板本には「観山文庫本」があって、壬辰倭乱以前に刊行されたもので「東京大学中央図書館本」と「尊経閣本」がある。

(写真資料 1) を参照して『訓蒙字会』の漢字音表記をよく見れば、純粋韓国語表記のように終声がない漢字音には何らの表記も加えず、事実通りに終声の入る場所を空白にしてある。例えば、「字」という漢字の場合、東国正韻式表記では[字]と表記されるのだが、この本(『訓蒙字会』)では現実漢字音そのままに[字]という表記になる。ハングルは朝鮮 10 代王である燕山君の時代に少しの間その使用が廃止されたが、次の王である 11 代中宗時に至り、漢字教育のための方便として通訳官崔世珍によりまた使用するようになったのだが、その代表的で書籍がまさに『訓蒙字会』である。もちろん壬辰倭乱(1592 年)以前までに、東国正韻式漢字音表記が完全に消滅したのではなかったが、少なくとも『訓蒙字会』が既に現実漢字音によって表記されていたということは多くの点を示唆する。すなわち、この時期に既に東国正韻式表記や発音のための世宗の語文政策が失敗に帰したことを意味するのである。

一般的に壬辰倭乱(1592 年)以後に初版が刊行されたあらゆる文献には現実漢字音が現れる。したがって『訓蒙字会』に見られる当時の現実漢字音どおりの表記をしたとするなら、この碑文は「남무아미타불」と表記されてこそ一致する。それにもかかわらず、1624 年に作られたこの石塔には朝鮮でも既に現実的に使われない東国正韻式漢字音表記が使われたという理由はどこにあるのか? この疑問に対する解答はちょっと抽象的であるのだが、この石塔のハングル石塔を作った人のハングルに対する認識と関連があるようだ。すなわち、この人が朝鮮のどんな本を探し求めて参考にしたのかが、重要な鍵となるはずだ。

結論を先に言えば、少なくともこの石塔のハングル碑文を書いた人が『訓蒙字会』をまだ手に取って見るができなかったものと考えられる。また、たとえ『訓蒙字会』を見ることができたと仮定しても問題は残る。なぜなら『訓蒙字会』の用例には「南」(남)字と「佛」(불)字の用例は出てくるが、残り 4 字の用例は見えないためだ。特にこの碑文では[佛]と表記される「陀」(타)字の用例がなく、この漢字の朝鮮式現実音を探すのは容易ではなかったのだ。

それなら、果してこの石塔東面に彫られたハングルは李朝時代に朝鮮半島から出版されたどのハングル本の書体をモデルにしたものなのか? 私たちはいくつかの側面からこの問いに対する答えを探して見るができる。

最初『東国正韻』(1447 年)から集字した可能性だ。しかし[写真資料 2]に現れた『東国正韻』のハングル書体を注意深く見れば、[ㅏ、ㅑ、ㅓ、ㅕ]や[ㅗ、ㅛ、ㅜ、ㅠ]等の母音字書体がこの石塔の書体とは違う。この石塔の母音字書体は、すべて線の形で構成されているけれど、『東国正韻』はというと[ㅏ、ㅑ]の上や下あるいは内側や外側に足した線が、皆円点で表現されている。例を上げれば[ㅑ]が[ㅑ]の形態を帯びている。この石塔には「佛」の音が[佛]と表記されているので、(写真資料 2)の[佛]の表記とははっきり違う。すなわち、[ㅓ]のずっとひく線が円点で表記されている。したがってこの石塔のハングル表記が東国正韻式と言っても、この碑文を書いた人が

.....

以前に刊行されたもので<東京大学中央図書館本>と<尊経閣本>がある。

- 4) 『訓蒙字会』に「佛」の音が現実音である[佛]で表記されていることが確認できる。
- 5) 『東国正韻』の母音字体がハングル創製当時の姿であるからこの石塔の母音字体より古形だ。

『東国正韻』の書体をモデルにした可能性は非常に希薄だ。

二つ目には、世宗時代に刊行された初期ハングル書籍等の書体をモデルにした可能性だ。特にこの時期の仏教文献で論じることができる本には、『釈譜詳節』(1447年)、『月印千江之曲』(1447年)等を挙げることができるが⁶⁾、この中の『釈譜詳節』の書体と表記法は、この石塔のハングル書体及び表記法と多少似ている。[写真資料 3]を参照して検討してみれば、『釈譜詳節』の字体がゴシック体で、隅が鋭い点と表記法がこの石塔の場合と似ている。ところが[写真資料 8]に現れたこの石塔のハングルと比較してみれば、子音字と母音字の調和がこの石塔の方より『釈譜詳節』の方がはるかにより四角形で安定的だ。一方、[写真資料 4]で見ると、『月印千江之曲』の場合、書体はこの石塔の書体と似ているけれど表記法がだいぶ違う。『月印千江之曲』の漢字音表記の特徴は終声がない漢字音には終声の場所に何らの表記もしなかったという点だ。終声がない場合に東国正韻式表記ではすでに述べたとおり[○]や[ㄱ]等を付けなければならない。例を挙げた[写真資料 4]では[味]の音を[ㄹ]で表記するのだが、東国正韻式であれば[ᄃ]と表記されてこそ理解できる。

一方朝鮮7代王である世祖時に刊行された『月印釈譜』(1459年)⁷⁾の書体を見ればこの石塔の書体とはだいぶ違う。この石塔の書体は隅が非常に鋭いのに比べて[写真資料 5]の『月印釈譜』の書体は隅が非常にまろくて軟らかい。『月印釈譜』というハングル書体の変遷史でも非常に重要な位置を占めている。なぜなら、『月印釈譜』以前のハングル書体がゴシック体で非常に硬く隅が鋭いのに、このようなハングル書体が徐々に柔軟になって隅がまるまった姿に変わって行く例をこの本が見せてくれているためだ。

三つ目の可能性のある本を考えると、世祖時代に刊経都監⁸⁾から刊行された各種仏経諺解書⁹⁾で『楞嚴経諺解』(1462年)、『円覚経諺解』(1464年)、『金剛経諺解』(1464年)、『法華経

.....

6) 『釈譜詳節』は世宗夫人である昭憲王后が、死者の冥福を祈るための仏事で、釈迦の一代記を首陽大君(後代の世祖)に編纂するように依頼したもので、〈釈迦譜〉・〈法華経〉・〈地藏経〉・〈阿弥陀経〉・〈薬師経〉等から抜粋して韓国語に翻訳した本だ。全25巻で世宗29年(1447年)に完成し、世宗31年(1449年)に刊行。『月印千江之曲』は世宗が『釈譜詳節』の内容を詩に移したもので、完成及び刊行年度は『釈譜詳節』と同じである。全3巻の作品であると推定されているが、現在上巻だけ伝えられている。

7) 『月印釈譜』は朝鮮7代王である世祖5年に刊行された本である。世祖が太子時に作った『釈譜詳節』と世宗が作った『月印千江之曲』を改稿して合編した本だ。現在完帙が伝わらず、総巻数をわからないけれど、三十余巻であったことが推定される。現伝する巻は初刊本と重刊本を合し1、2、7、8、9、10、13、14、17、18、21、23の12巻だ。

8) 刊経都監は世祖3年(1457年)に設置され、成宗2年(1471年)に閉鎖となった国立出版機関の一種だ。世祖は公的には指導理念として儒教政策を奨励する一方、個人的には世宗と共に仏教を篤く信じて仏教振興のために多角的に努力した。その結果、刊経都監から多くの仏典が韓国語に翻訳された。信眉、守眉達の高僧と韓継禧、尹師路、黄守身、盧思慎、姜希孟、姜希顔等の学者が多くの業績を残した。

9) 仏経諺解書は漢文で刊行された各種仏経を当時の韓国語に翻訳してハングルで刊行した本を言う。

諺解』(1463年)、『般若心經諺解』(1464年)、『阿彌陀經諺解』(1461年)等を挙げることができるが、私が見るかぎりでは、この中でもこの石塔書体のモデルに最も有力な本は『阿彌陀經諺解』だ。『阿彌陀經諺解』は今紹介した他の仏經諺解書等と同じ時期(15世紀後半)に刊行された書だが、この書が浄土宗の重要な所依經典¹⁰⁾という点に立ち、特に私たちの関心を引く。

現在伝えられている『阿彌陀經諺解』には、〈活字本〉(1461年)があつて復刻本である〈双溪寺本〉(1558年)と重刊本である〈桐華寺本〉(1753年)、〈水巖寺版本〉(1636年)と復刻本である〈雲興寺版本〉(1702年)と、比較的後代に刊行の徳寺版本(1871年)等がある。この『阿彌陀經』は初版発行以後何度も重刊または復刻された。それだけ、この經典は『般若心經』に次いで、仏教信者らに広く読誦されたものだ。この中で、このハングル石塔が作られた1624年以前に刊行済みの版本は〈活字本〉(写真資料6)と〈双溪寺本〉(写真資料7)の二つだ。この二版本中でも、〈双溪寺本〉の書体がこの石塔の書体と非常に似ていたものと思う。〈活字本〉の書体は字画の隅が軟らかい反面〈双溪寺本〉は木版本なのに、字画の隅が比較的鋭くて子音字と母音字のつりあいがこの石塔のハングル書体と非常に似ている。

一方、刊行年代の上から見る時、〈双溪寺本〉(1558年)は『釈譜詳節』や『月印千江之曲』そしてその他の今まで列挙した初刊本仏經諺解書が出されて以来ほとんど100年が過ぎた時点で刊行されたという点が説得力がある。他の初期の諺解書が100年という歳月の間に、失われたために、また復刻本が刊行され、この双溪寺本『阿彌陀經諺解』こそ壬辰倭乱前まで朝鮮に伝えられた諺解本であり、この本が日本まで流伝したものと思われる。そして、双溪寺本『阿彌陀經諺解』は正にこの石塔ハングル書体のモデルになった可能性が非常に高い。ただし、ここで[ト]の場合、横からひく直線が[|]の中央に[ト]形式で正確に表記出来なくて、上の方に偏っていることが疑問だ。このような書体は中世ハングル文献にはあまり現れない。

以上の論議を要約して結論を下せば、この石塔のハングル表記は東国正韻式漢字音表記法に従ったのであつて、朝鮮から伝えられた双溪寺本『阿彌陀經諺解』の書体を見習ったものと推測される。

結局[남무함미당불]を現代韓国語で表記すれば「나무아미타불」となる。この言葉の意味を少し注意深く見てみると、「南無」とはサンスクリット語(梵語)で「帰依する」の意味で、「阿彌陀」は「西方浄土を主宰なさった仏様の名前」で、浄土宗の立場より見れば、他の菩薩よりより重要な意味をもつ仏様だ。現実的な生の苦海から抜け出し、極楽世界へ行こうとする衆生が昼夜に念誦する仏様だ。最後の「佛」は「仏様」という意味であることは言うまでもない。このように見れば、「南無阿彌陀仏」の全体的な意味は、「阿彌陀仏様に帰依する」となる。この言葉はそのまま仏に対する一種の信仰告白であり、救済を願う祈りである。

.....

10) 浄土宗の所依經典には、『阿彌陀經』・『無量壽經』・『觀無量壽經』があつて、浄土三部經と言われている。

朝鮮から遠く離れた異域の土地に、このようなハングル碑文が彫られたのは、壬辰倭乱時に犠牲になった朝鮮の人たちの魂と、捕虜となって連行されてきた朝鮮の人の心情を慰めるためであり、それは雄誉上人の偉大な仏心の結果であろう。そしてこの碑文を通じて、われらは壬辰倭乱以後日韓両国の政治指導者達に代わって、宗教指導者が先頭になって、両国間の和解と交流を積極的に図ったものと判断できる。雄誉上人のこのような行蹟は、壬辰倭乱当時、朝鮮の僧侶維政（泗溟堂）が無謀な殺生に苦しめられた民衆の孤独な生を救援するために、死をかえりみず倭将加藤清正の陣中を三度も訪問して、和議を請い戦争を終結したこと、そして1604年には朝鮮国王の国書を携え、直接日本へ渡り、徳川家康に会って講和を結んで、朝鮮人捕虜3,500名を救出して帰国した活躍の姿とも一脈通ずるものがあると言えるのではなかろうか。

【参考論著】

- 姜信道(1997),『増補版訓民正音研究』,成均館大学校出版部,ソウル.
 李鍾洙(1997),『改訂版訓民正音新研究』,図書出版宝庫社,ソウル.
 金吉祥(1998),『仏教大辞典』上,下,弘法院,ソウル.
 張栄吉ほか(1993),『金剛経諺解註解』,東岳語文学会,東国大学校,ソウル.
 _____(1995),『般若心経諺解の国語学的研究』,図書出版大興企画,ソウル.
 _____(1997),『阿弥陀経諺解の国語学的研究』,法宝新聞社,ソウル.
 石和田秀幸(2001),「日本韓(朝)友好の先駆者雄誉上人」,『千葉のなかの朝鮮』
 千葉県日本韓国・朝鮮関係史研究会.
 愛沢伸雄(1995),「大巖院四面石塔に刻まれたハングルの謎」,『房総史学』35号,
 千葉県高等学校教育研究会歴史部会.
 Gari K.Ledyard(1998),The Korean Language Reform of 1446, 新旧文化史,ソウル

【影印本】

- 檀国大学校出版部(1971/1983),『訓蒙字会』〈叡山本〉,檀国大学校東洋学研究所,ソウル
 弘文閣(1995),『円覚経諺解』,弘文閣,ソウル.
 _____(1992),『金剛経諺解』,弘文閣,ソウル.
 _____(1984),『月印積譜』(7,8巻合本),弘文閣,ソウル.
 大提閣(1985),『東国正韻』,大提閣,ソウル
 _____(1985),『積譜詳節』(6,9,13,19,23,24巻合本),大提閣,ソウル.
 _____(1985),『楞嚴経諺解』,大提閣,ソウル.
 _____(1985),『円覚経諺解』,大提閣,ソウル.
 _____(1985),『法華経諺解』,大提閣,ソウル.
 国語学会(1962),『月印千江之曲』(上),通文館,ソウル.
 張栄吉ほか(1995),〈般若心経諺解〉,『般若心経諺解の国語学的研究』,図書出版大興企画,ソウル.
 _____(1997),〈阿弥陀経諺解:活字本,双溪寺本〉,『阿弥陀経諺解の国語学的研究』
 ,法宝新聞社,ソウル.

(以上石和田 秀幸訳)

[寫眞資料]



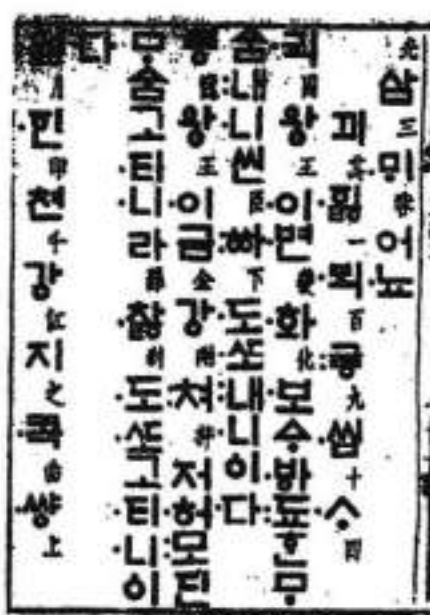
[寫眞資料1] 訓藏字會



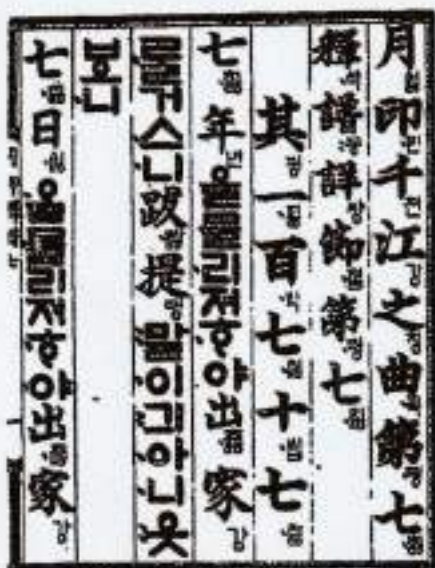
[寫眞資料2] 東國正韻



[寫眞資料3] 釋譜詳節



[寫眞資料4] 月印千江之曲



[寫眞資料5] 月印釋譜



[寫眞資料6] 活字本阿彌陀經諺解



[寫眞資料7] 雙溪寺本阿彌陀經諺解



[寫眞資料8] 大巖院石塔碑文

나무아미타불

北面	西面	南面	東面
<p>卍 卍 卍 卍 卍 卍</p>	<p>卍 卍 卍 卍 卍 卍</p>	<p>卍 卍 卍 卍 卍 卍</p>	<p>卍 卍 卍 卍 卍 卍</p>
<p>于時元和十年三月十四日房州山下天綱村大藏院檀道社雄譽 寄蓮水向施主山村彦兵衛建譽起西信公榮壽信女爲逆修 乃乃乃乃乃乃</p>	<p>南無阿彌陀佛</p>	<p>南無阿彌陀佛 門門不同八万四爲滅無明果業因 利劍即是彌陀号一聲拜念罪皆除</p>	<p>南無阿彌陀佛</p>

<大藏院石塔碑文>